わたしの聖戦（ジハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 56

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津江

チップと日本人

海外へ行って戸惑うことのひとつに「チップ」がある。ホテルやレストランなどでサービスを受けた際に、1～2ドル、あるいは食事料金の10%～15%を支払うというもの。ちょっとした「心ばかりの御礼」の意味合いがある。

日本ではほとんど見かけないこのチップ習慣による苦い思いや失敗談を持っている方は多いことだろう。チップが苦にならなくなったら海外はひとりで大丈夫という人だってあるくらいだ。

チップはあくまでその国の習慣だから、慣れていないだけだといわれればそれまでだが、単に習慣の問題としてではなく、決められた金額より余分に手渡す行為が失礼にあたるのではないか、との危惧が我々にあるように思う。何か相手を見下しているような、そんな気はサラサラないのにそう思われるのを極端に恐れるような…、どうも相手の気持ちばかりを推し量りすぎてうまく感謝の気持ちが態度や言葉になって出てこない。

逆に日本人のチップは多すぎるという批判の声があれば、じゃいったいいくらならいいのかしら？

とさらに迷う。チップの概念を理解せずに、チップとは請求された金額の10%前後を払うと教えられると、持参した計算機片手に細かく計算せずにはいられない。

マニュアル大好きな日本人にとって「そのときどきのサービスの質に応じて」なんて極めて漠然とした意味を持つチップの習慣は甚だ苦手であるのだ。

少し前までは旅館に宿泊する際に、部屋の案内や料理を運んでくる「お部屋係り」の人にお金を渡すことがあった。こういうときにもそのままではなく、ちり紙に包んだり封筒に入れたりし、「しばらくお世話になります」とか「少ないですが」などの謙遜あふれるせりふとともにそっと差し出したものだ。厳密にいえばこれはチップではない。サービスを受けた後の御礼ではなく、あくまで「挨拶」の一環であるが、これはこれで特有の習慣であり、旅行という非日常を楽しむ余裕が漂う風景であった。

しかしこれも、温泉旅館全体の様相がホテルに近づき、食事はバイキング形式のところが増えるに従い、チップに似たこんな習慣も段々となくなりつつあるようだ。

もともと日本には「あ・うんの呼吸」の伝統が根強く、わざわざ口に出さなくても理解できる―、そういう風潮を尊ぶところがある。目で語りかける、会話するなんていうのも同様で、具体的より抽象的、はっきりより曖昧、お金よりこころ、などの独特の文化が根底に流れている。

海外の人からみればこちらのほうがよほどわかりにくいはずだ。

かくいう私もチップには苦労した。うっかり両替を忘れ1ドル札を持っていなかったり、チップを忘れたレストランを出た後で、ウェイトレスが怒って追いかけてきたこともあった。

ベトナムを訪れたある日のこと、ここではチップ不要と旅行本に書いてあったのですっかり安心していたのだが、恰幅のいいヨーロッパ人がさり気なくチップを渡し、自然にそれを受け取る女性を見て、「払いたければ払い、気に入らなければ払わなければいいんだ」とチップの原点を理解した気になった。つまり「自分次第」ということ、そう、海外では品よくかつ堂々と振舞うことが必要と妙に達観し、それ以後チップは怖くなくなった。

イラスト・三浦義雄